市制施行70周年連載企画

振り返る70年

問い合わせ
企画財政課　☎59-2124

第12回（最終回）西暦2000年にあった「文化の国体」国民文化祭

ビッグイベントが続いた20世紀の最後を飾るイベントで、まちに文化の華が大きく開いた国民文化祭が開催されました。

国民文化祭の始まり

国民文化祭とは、音楽、演劇、伝統芸能、舞踊、文芸、美術、生活文化などさまざまな文化活動の成果を全国的な規模で発表し交流する総合的な文化の祭典である。「文化の国体」とも言われている。昭和52（1977）年から始まった全国高等学校総合文化祭に対抗し、一般の団体でも全国規模で参加する文化祭をしようと、当時の文化庁長官で作家の三浦朱門（しゅもん）氏（故人）が提唱し、文化庁と東京都の共催で昭和61（1986）年にNHKホールで第1回大会が行われたのが始まりであり、以後毎年各県の持ち回りで開催されている。平成12（2000）年の広島県での国民文化祭は第15回という節目の大会にあたり、中国地方で初めての開催であった。

「川柳」と「ジャズダンス」に決定

本市では、平成12（2000）年秋に開催予定の「第15回国民文化祭ひろしま2000の基本構想」について、平成9（1997）年1月に県から照会があった。このとき市教育委員会は、文芸（短歌、俳句、川柳、現代詩など）であれば対応可能と回答している。

続く、実施事業についての開催希望の照会でも、第1希望「川柳」、第2希望「短歌」で回答しており、市は「川柳」または「短歌」であれば、市内に活動している文化団体もあり、開催は可能であると考えていた。

ところが、県文化振興室長から「できれば大竹市には『川柳』と『ジャズダンス』2種目の開催を引き受けてもらえないか」と打診されたのである。市としては、「川柳」は希望した種目であり、引き受け可能であるが、「ジャズダンス」は、会場にできるようなホールもなく、運営も不安があることから引き受けにくい種目であった。しかし、大会の諸事情を考えると「決定されれば、引き受ける」と約束することもやむを得なかった。

その後、市内にも小・中・高校生を中心にしたジャズダンスの同好会などがあることが判明、また、会場については県の補助金などを財源に総合体育館を臨時のホールに仮設することにした。こうして文芸祭「川柳」と洋舞「ジャズダンスフェスティバル」の開催が大竹市に決定されたのである。

元祖ゆるキャラ「ブンカッキー」

平成10（1998）年3月に、国民文化祭が「広がる生命（いのち）輝く未来」をテーマに県内各地で平成12（2000）年11月3日～12日の10日間で開催されることに決定した。さらに文化の指揮者をイメージし、秋に色づく美しい「モミジ」、瀬戸内海の新鮮な「カキ」、広島の頭文字「ひ」を表しているデザインとなっているマスコットキャラクターが、全国公募を行って選定された。また愛称「ブンカッキー」は、マスコットキャラクターのモチーフとなった「カキ」と「文化」を組み合わせ、明るく活気のある文化祭となるよう願いを込めて名付けられた。余談であるが、この「ブンカッキー」から「ゆるキャラ」という概念が生まれている。

本番に向けてプレ大会開催

予行演習も兼ねたプレ大会として、平成11（1999）年10月17日、第9回県民文化祭文芸祭（川柳大会）が大竹会館アゼリアホールで行われた。事前投句に885人の方から、6939句の応募があり、また当日投句には203人が参加し、812句の応募があった。さらに「子ども川柳」では485句の応募があった。これは新聞社への働きかけやラジオ出演、県内の句会へ参加するなどの広報活動を積極的に展開したことが功を奏し、結果につながったのである。また、大会当日は、開会までの時間を地元文化協会による「茶席」と「邦楽演奏」で歓迎し、大好評であった。

一方、ジャズダンスフェスティバルのプレ大会として、同年11月7日、第9回県民文化祭ジャズダンスフェスティバルが総合体育館で行われ、県内の11チームが出場、市民らおよそ1100人の観客は躍動感あふれるステージを楽しんだ。

また、平成12（2000）年5月には、ジャズダンス1日体験講座「親子でたのしむはじめてのジャズダンス」「男性のためのはじめてのヒップホップダンス」が開催されている。当時は、ジャズダンスとエアロビクスの区別がつかない方も多く、少しでも多くの市民にジャズダンスの楽しさを知ってもらおうと企画された講座だった。

ブンカッキーと立戸保育所の子どもたち。

和紙のまちで川柳大会

平成12（2000）年11月4日大竹会館アゼリアホールで文芸祭（川柳大会）が開催された。全国および海外から川柳作品を募集・審査し、入賞作品などを発表・表彰するとともに、当日投句や選評などを行い、川柳愛好者が交流し、文芸の真価を広島から発信した大会となった。

当日は秋晴れのなか、当日投句の締め切り間際まで受付は参加者であふれ、会場は超満員の状態での開会となった。前年から新設された「小・中学生の部」では、前年を大きく上回る約2万句もの応募があり、未来へ大きな期待が膨らんだ。また、昼食休憩時間を利用して、会場前広場で地元特産品の物産展を開催し、多くの参加者でにぎわった。特に、和紙で栄えた町であった大竹市として、和紙の紹介に力を入れ、「和紙こいのぼり」の製作実演の前では、多くの参加者がその伝統技術に見入っていた。午後からのアトラクションでは、大竹少年少女紙太鼓アンサンブルチームによる和紙で作った太鼓の熱演があり、「和紙のまち大竹」を大きくアピールできた大会となったのである。

大竹少年少女紙太鼓アンサンブルチーム

昭和59（1984）年に大竹市青少年育成市民会議が立ち上げた、大竹市特産の手すき和紙を張った5種類の「紙太鼓」の演奏をする小・中学生のチームが始まりである。平成元（1989）年からは、穂仁原小学校で取り組まれ、さまざまなイベントなどで演奏を続けるなど、市内でも人気のチームだった。

観客を魅了したジャズダンス

一方、11月5日に総合体育館で開催されたジャズダンスフェスティバルでは、往復はがきによる鑑賞券の応募が予想をはるかに上回り、開場2時間半前から観客およそ1000人が列をなして開場を待つような状況であった。

オープニングは、オーディションにより選出された広島県内ダンサーと当時東京で活躍中の広島県出身ダンサーたちによる創作作品「広場へのパレード」で幕を開けた。続いて全国各地から集まったジャズダンス愛好家による、すばらしいダンスが繰り広げられ、スローテンポの群舞や激しいヒップホップダンスなど、個性を生かしたステージは、満場の観客を魅了した。

また、平和の祈りを込め「ヒロシマレクイエム」というオリジナル作品を、国内外で活躍するプロダンサーに、オーディションで選ばれた広島県内ダンサー13人を加えた32人が、原爆投下の廃墟から立ち上がる人々をダンスで表現した。さらに「灯ろう流し」のシーンでは、地元大竹市内を中心にした50人の中学生が灯ろうを持ち、暗闇の中、川面を流れる灯ろうを幻想的に再現し、感動のステージが満場の観客の心にいつまでも残った。

後日談であるが、文芸祭（川柳大会）において、当市ゆかりの「和紙」という題で、和紙の持つ神秘的なすごさをみごとに表現している句と選者から絶賛され、文部大臣奨励賞を受賞した「実印を押しても和紙は妥協せず」という句を刻んだ記念碑が会場になった大竹会館アゼリアホール駐車場の一角に建立されている。この記念碑は個人の顕彰碑的なものとしてではなく、大会の開催記念碑として建立したので、あえて作者の名前は入っていない。

（上）紙太鼓アンサンブルチームの熱演（下）全国から寄せられた川柳投句の山。

（上）開催告知の広報おおたけ平成12年10月号（下）前年のプレ大会のジャズダンスフェスティバル。